

空間を領有すること…あるいはその領有に異議を申し立てること？

ー現代社会運動の一視点ー

ファブリス・リポール*
(遠城明雄** 訳)

Fabrice Ripoll

S'appropriation de l'espace…ou contester son appropriation? Une vue des mouvements sociaux contemporains,
NOROIS, 195, 2005/2, pp.29-42

Copy Right Received from Presses Universitaires de Rennes

地理学(社会地理学でさえ)は社会運動という問題を取り上げてこなかったし、それを研究する諸社会科学は運動の空間的次元を考慮しない傾向があった。この欠落を埋めるための最初の方法のひとつは、現代の社会運動、特に「もうひとつの世界主義者(反グローバリゼーション)」運動における空間の領有の場所を決定することである。これらの運動の明示化された争点と権利要求のなかで空間の領有の占める場所は何だろうか。近年の歴史を一瞥することで、(生産と生計維持の手段としての)物質空間の私的領有が、資本主義とそれへの異議申し立て(特に農民や「ホームレス sans-logis」の運動が重要かつ象徴的な場を占めている)の核心であることが示される。さらに、現代のさまざまな運動によって実行されている集合的行為のレパートリーを分析することで、空間の領有が、その物質的・象徴的にさまざまな意味で、賭金であるのみならず、行為の戦術と資源にもなっていることが示される。

キーワード：もうひとつの世界主義、空間の領有、社会紛争、世界化、社会運動、集合的行為のレパートリー

集合的行為、諸社会運動、さまざまな形態の戦闘主義(組合、政治、アソシエーション)は、実際に地理学(社会地理学でさえ)の研究対象であったとは言えない。その徴候として、これらの用語は最新の地理学辞典のなかにも出てこない。場合によっては、唯一紛争 *conflict* という言葉を発見できるが、それもわずかなスペースである。地理学がこうした行為を研究してこなかった一方で、最近10年間、集合的行為に関する研究はフランスでこれまでにない発展を経験しているとしても、その専門家たち(社会学者、政治学者、歴史家、経済学者)が空間を体系的に深く探究しているわけではない。

したがって、(物理的な枠組として理解される)空間は、必然的に社会諸関係、場合によっては紛争や戦争を勃発させる権力諸関係の賭金であるという、今となっては古典的な仮定を再度取り上げることで、この欠落を埋めることが重要であると思われる(Frémont et al. 1984; Lacoste, 1976)。しかし、特に一般的に、あらゆる社会運動のそれぞれの言葉は、(厳密な意味で)無視し得ない空間的次元を必ず有しているということである¹⁾。動員の発端と展開、支援および抵抗、組織とその要求、同盟と対立、戦略および戦術、さまざまな形式での行為…は、そ

の空間(あるいは空間-時間)、コンテクスト、相互の位置関係、距離あるいは近接性、スケールなどを持っている。空間的次元は、集合的行為を制約すると同時に「それに権限を付与する」条件として検討することができる。そして空間は、社会運動や紛争の賭金としてのみならず、その手段と様式として理解できる。

こうした問題構制をさらに進めるためのひとつの方法として、社会運動のなかに空間の領有の場所を決定しようと努めることがあるだろう。ここで、その読解のためのいくつかの仮説と道筋を導き出すために、二つの問いが取り上げられる(大雑把だと認めざるを得ないけれども)。①(現代)社会運動(特にいわゆる「もうひとつの世界主義者」運動)の明示された賭金と要求において空間の領有の場所とは何だろうか。②空間の領有は行為の様式、手段、資源となりえないのだろうか。

* 東パリ大学 クレティユ(パリ第12大学)

** 九州大学

世界の領有、「もうひとつの世界主義者」の社会運動の不可避の賭金？

「領有が個人と集合体の「存在」に寄与するとしたら、それは間違いなくさまざまな紛争の基本資源である」(Brunet et al., 1993)

人間集団が辿ってきた歴史は、おそらく生存空間や生計維持手段(そしてある人々にとっては、豊かさのための手段)のみならず、聖なる場所や象徴的な場所としての地球およびその諸資源の領有と結びついた戦争と社会紛争であった、と主張できるだろう。そして近代性がこの暴力を抑制したと主張することはできない。正反対である。人権宣言にも関わらず、武装による領有、さまざまな形態の植民地化、大量虐殺、「民族浄化」、その他の強制的な人口の大移動は、現代世界の重大な事実である。ここ数十年間で複数の国家の誕生が目撃された。それは、ヨーロッパモデルの輸出、ソビエトやかつて存在した国々の内破、戦争それ自体、あるいは勝利を収めた独立主義者やナショナリストの権利要求の結果である。『エロドット Hérodote』や『文化と紛争 Cultures et conflits』といった学術雑誌やジャーナリズムの現状は、すぐそこまで来ている世界の「脱地政化 dégéopolitisation」(Lévy, 1996)を疑わせるしばしば劇的なこの多元的状況を反映している一脱地政化それ自体は望ましいことであるけれども。

おそらく現実のコンテクストもまた、人類史において前例のない状態になっている。しかし「世界化」、つまり経済、なかでも金融市場の世界化は、平和の同義語として真剣に考えられていないだろうか。境界の急激な開放、規制緩和による自由競争の普遍化は、新古典派(自由主義)経済学理論が主張するように、実際に「資源の最適配分」、つまり普遍的調和を促進するのではないだろうか。あるいは反対に、非自由主義経済学者が主張するように、世界化は政治闘争に直接関与する人たちにとって、^{ドランスナショナル}不平等と悲惨な状況の増大(特に多国籍あるいは超国籍企業、若干の国家と社会的カテゴリーの人々による富の私的領有は、それ以外のすべての人々に対する相対的かつ絶対的な剥奪となって現れるので)さえ引き起こしているのではないか²⁾。

いずれにせよ、この論争は、地表面とその諸資源の軍事的かつ経済的な領有が、現代社会運動、とりわけ「もうひとつの世界主義者」を自認する人々にとって、なおさら重要な賭金になりうることを示している。

資本主義、あるいは私的所有が世界……システムを作る

外部に対する戦争と支配の道具である近代国家は、その領土への正統な暴力の独占を主張する。そして暴力の独占によって可能となる税の独占は、逆にこの暴力に資金を提供することになるので、暴力の独占それ自体と切り離せないものである(Élias, 1990)。しかし以上のことは、近代国家は自然や空間の領有をめぐる問いを最終的に調整すること、また近代国家は、その内部で敵対する利益集団間の対立や、国家自体の権力と独占そのものへの抵抗に際して生じる暴力的な対立を回避すること、を意味するわけではない。ブルジョワ勢力の台頭と資本主義の発展は相互に支えあう関係にあったが、それではなかった。「本源の蓄積」が、国際的規模で組織された略奪、植民地化、奴隷のみならず、ヨーロッパ社会における農民家族の搾取、さらには土地の強制収用一大英帝国とその有名な「囲い込み」がこの過程を主導した一と同義語であったことは公然の事実である(Marx, 2001; Beaud, 1990)。反対にフランスでは、産業革命が遅れて、しばしば移民を利用しなければならなかったが、その主な理由は、^{デラシヌスマン}根こぎされることとプロレタリア化に対する農民(そして職人)の強力な抵抗にあった。この抵抗を理解するためには、第二次世界大戦後までかなりの数を占めていた労働者・農民あるいは農民・労働者にとって、自給自足あるいは少なくとも無視できない生計補助を可能にした、小規模土地所有と共同体の存続を考慮しなければならない(Noiriél, 1986)³⁾。

工場や鉱山での人を消耗させる低賃金で危険な労働。誰も「自ら進んで」労働者になることはけっしてない(Dubet, 1992)。しかし、大多数の人々にとって、そうならざるを得ない。近代国家と資本主義、工業化と都市化が発展した場所で、「民衆」運動の権利要求は、それを担う男性労働者(そして女性労働者)のみならず多くの人たちがますます土地から切り離されているので、存在の経済的諸条件と結びつくようになる。つまり、飢饉や租税に対する反乱、労働争議(給与、労働時間、労働条件その他)、再分配措置の獲得と擁護(失業保険、病気保険、年金その他)である(Castel, 1995; Castel et Haroche, 2001; Tilly, 1986)。それで「長い19世紀」、フランス革命から第一世界大戦へと至る反乱と革命の世紀は、社会全体の規模で所有という問いを提起した。所有は基本的権利、おそらく他の権利と比べて最も基本的権利となり、社会を所有者と非所有者に分割

した。なぜならトクヴィルが強調したように、フランス革命は「すべての特権者を打ち倒し、排他的権利をことごとく破壊したとしても、ただひとつ所有権を存続させたままであった。そしていつか政治闘争が所有する人々としらない人々の間で生じるだろうこと、所有が広大な戦場となること、大きな政治問題は所有権に生じる多少とも根本的な修正に関わるだろうこと、は疑いないことである。」⁴⁾ マルクスとともに、またマルクスに関わらずとも、社会階級と複数の所有形態（個人、共同体、社会、市民、アソシアション、国家など）をめぐる議論は19世紀後半に沸騰し、革命家や改良主義者など複数の「主義者」の教義を生み出した（Ory, 2000）。とりわけ、マルクス主義の諸潮流によって構想されて有名になった「生産手段の所有」は、「労働運動」と呼称されるようになった運動の中心的な政治問題となる。そして周知のように、その後数十年間にわたって優位に立ったのは国家的所有形態であった。

ありとあらゆる蛮行の記録を破った二度の世界大戦において、競合するナショナリズムと帝国主義、ファシズムと反ファシズムの血で血を洗う殺し合いを目撃した後、「短い20世紀」、エリック・ホブズボウム（1999）によれば、極端な時代は、資本主義体制と（国家）共産主義体制の多かれ少なかれ「冷たい」対立を見ることになる。この対立は後者の崩壊によって前者の支持者が世界規模でその勝利に酔いしれるまで続いたが、新たな競争は目前に迫っていた。ある人々にとって、この世紀はベルリンの壁とソビエト連邦の崩壊とともに終焉したが、異議申し立て者たちにとって、同じ過ちを繰り返さず、特に法的所有を私的官僚主義から国家官僚主義へと単に移譲することに満足せずに、別の世界を創造する責務が残されている（Castoriadis, 1973, 1999）。いずれにせよ、多くの活動家たちは世紀末の状況をこのように感じ取っているように思われる。「もうひとつの世界主義者」運動のただなかで所有をめぐる問いが、新たな言葉によってであるが、提起され始めた。（富、自然、生物、知などの）私有化と「世界の商品化」の論理に反対するために、「公共サービス」や「社会的領有」が擁護され、「世界的な公共財」や人類の「共有財」が語られている。そしてそれは「富」⁵⁾によって理解されるべきものの再定義にまで至っている。領有という主題が至る所で問題となっているのである。ATTAC⁶⁾は、なにも恐れることなくその綱領に「我々の世界の将来を全員で再領有することだけが問題である」と提示した（Attac, 2000）。「複数の立場で活動する」（SUD-

PTT²⁾、LCR³⁾、AC!⁴⁾、Marches européennes contre le chômage 反失業ヨーロッパ行進、ATTAC) 国際的活動家のクリストフ・アギトンにとって、「世界は我々のものだ」（Aguiton, 2001）。

「世界の商品化」に抵抗する農民

「中流階級」が「ポスト工業」社会のなかで増加し、金融が世界経済を支配するとしても、労働者そして特に農民は、地球規模で主要な社会・職業集団にとどまっている。土地と諸資源の所有、その労働の果実を享受する権利、自給自足などは、なによりもまずこれらの集団に関わるきわめて重要な賭金である。多くの人々にとって、ただ生き残ることだけが問題である。無視あるいは忘却されるところか、農民闘争はしばしば、資本主義的あるいは新自由主義的世界化に抗する闘争の支柱として現出し、その「収用」は強く告発される。インドの哲学者ヴァンダナ・シヴァにとって、多国籍企業は農民たちを収奪している。つまり「特許権の政治とは組織された収奪である。我々は遺伝子資源を奪われ、それは特許権という形式で我々に転売される」（Losson et Quinio, 2002 による引用）。第三世界の債務取消を求める会議 CADTH(Comité pour l'Annulation de la Dette du Tiers-Monde) 代表のエリック・トゥッサンにとって、「土地所有に関して、国際通貨基金と世界銀行は、あらゆる形態の共同体的所有を消滅させるために延々と続く攻撃を開始した。こうして二つの機関は、エヒードと呼ばれる共有財を保護するメキシコ憲法の条文の修正を取り付けた。そして現在この機関が取り組む大事業のひとつは、サハラ砂漠以南アフリカにおける共同体あるいは国家の保有する土地の私有化である…」(Collectif, 2000)。

それはフランス革命の成果に疑問を呈することになるので、メキシコ憲法の修正は、おそらく先住民共同体の反乱と1994年1月1日のチャパス州でのサパティスタ運動の根本的な起爆剤となった（Baschet, 2002）。1996年に組織され、40ヶ国から3,000人以上が集った「人権を擁護し、新自由主義に抗するための大陸間会議」以降、サパティスタは世界化への異議申し立て運動のパイオニアと見なされるようになる。1996年に最貧困層の人々の団結のために、ブラジルのポルト・アレグロで最初の行進が組織され、1998年にそれは「持たざる者たちの行進 Marche des Sans」となって、数万人（職のない、給与のない、家のない、土地のない、食料の

ない人々)が集った。1999年にその運動は、政府と国際通貨基金に反対する全国規模の「数十万人の行進」となった。「農地を持たざる農民運動 MST, Mouvement des Sans Terre」は、この間未利用地を占拠し、また対外債務不払いをめぐる議論をリードして、新自由主義に抵抗し闘おうとするさまざまな闘争を支援することによって、カルドーゾ政権に対する闘争において重要な役割を演じた⁶⁾。ポルト・アレグロでの世界社会フォーラムに際して、これらの運動がその中心となったのはまったく当然の成り行きであった。

農民は、「北」でさえ異議申し立ての展開で重要な役割を果たしている (Duclos, 2002)。フランスのジョゼ・ボヴェ Jose Bové はもはや紹介の必要もない。ボヴェはフランス農民同盟 *Confédération paysanne* のスポークスマンとしてメディアに登場していたが、ミロにあるマクドナルドの「解体」あるいは「破壊」(解説者の政治的立場によって異なるが)以来、その立場をはるかに越えて、運動全体を象徴する人物となった。遺伝子組み換え作物に対する闘争や生産主義的農業によって、その告発は「質の悪い食料」にとどまらず、生物の領有と農民の収奪にも及んでいる (Bové et Dufour, 2001; Bové, 2002)。「北」と「南」の諸組織(フランス農民同盟と農地のない農民運動など)が、1993年に旧「ヴィア・カンペシナ *Via Campesina*⁶⁾ (第1回農民インターナショナル)」のために結集した時、そのきわめて明確な要求の中心は「食料主権 *souveraineté alimentaire*」⁷⁾であった。理論上は、労働者運動に取って代わったり、あるいはあらゆる異議申し立て者の中心にならなかったとしても、全世界の(貧しい)農民たちは、ほぼ「もうひとつの世界」運動の英雄的な中心人物となっている。食料と環境という分類不可能な社会の賭金となる問いを介して、「都市の中流俸給者階級」は農民のなかに無視できない支持者を、また農民も都市住民に支持者をそれぞれ発見する。この同盟関係は、土地 *la terre*…そして地球 *la Terre* との諸関係をこれまでになく方法で提起することで、ますます張りめぐらされつつある。

環境を保護する人々から「ホームレス」へ

争点は、生産手段や生活水準の問題だけではない (Crettie et Sommier, 2002)。1970年代に「新しい社会運動」と呼ばれた運動は、「ポスト唯物論者」と形容された。生活が保証されると、中流階級は別のタイプの要求に方向転換した (Fillieue et Péchu,

1993; Neveu, 2002)。エコロジスト、フェミニスト、同性愛者などの権利要求は、労働運動とは異なる視点から、一般的利害、さまざまな社会的アイデンティティ、複数の権利といった問題を提起した。しかし今日、こうした活動家たちの多くによって敵対者とされている陣営は、「もうひとつの世界主義者」の連合に参加する農民やその他の集団にとっても敵である一周知のように、敵を定義することは社会運動の構築における本質的条件である (Touraine, 1978) 一。敵対者は、非民主主義的で、地球上の生命まで見直そうとしていると考えられるシステムと経済政策である。エコロジストの要求は、(時にやや性急に「NIMBY 現象」と呼ばれることもある)環境保護、生活枠組の防衛や遺産の保護、あるいは「パブの破壊者」と結びつくことによって、空間を領有する意志に依拠しているとは考えられないだろうか。あるいは反対に、空間の領有に異議申し立てをする意志を示していると考えられるのではないだろうか。「生産主義」、さらには「開発主義」(Latouche, 2004)に対する批判の高まりは、「自然の主人かつ所有者」であるというデカルト的意志を告発するとともに、自由・資本主義のみならず古いタイプのマルクス主義もその対象としていることは間違いない。いずれにせよ、これらの批判は自然の利用やその価値の問題を交差させ…、さらにその問題を市場の論理、より具体的には法的所有と対立させる。フランス農民連合に属する農民たちのみならず、その他の社会集団や組織の構成員による、遺伝子組み換えとうもろこしを一掃しようとする行為は、私的所有という名目の下でフランスの裁判所によって抑えられたが、こうした状況の見本である。ジョゼ・ボヴェが(非暴力の)「市民的不服従」という考えを守る時、活動家が自らの行動を擁護し説明するために援用したのは、遺伝子組み換え作物の野放しの散種によって問題となる一般的利害であった。

さまざまな社会資源に恵まれない別の集団は、今度はむしろ都市空間への所有権を望んでいる。「ホームレス」や「住宅困窮者 *mal-logés*」は貧困国にとどまらない。居住空間の領有、「屋根・家 *toit*」へのアクセスは、長年にわたって多少とも潜在的な政治論争と社会闘争の重要な賭金であった。一般的に多かれ少なかれ野放図な都市化も加わって、「社会問題」は「住宅問題」の形を取り、諸闘争は「都市的」となる (Castells, 1975)。フランスでは1980年代に住宅危機が始まったが、1990年代を迎えるとより深刻化する (Havard-Duclos, 2000; Péche, 2002)。それは、「住宅困窮者会議 CML (Comité des mal-

logés)」とともに「始まる」。この会議は1987年に創設されたが、その当時冬季に家族（大部分は移民）を収用していた簡易宿泊所への放火が続いていた。会議は特に首都パリでさまざまな活動に従事しており、労働者と失業者のための適当な住宅への権利を要求している。その家賃は収入の20%を超えず、また代替住宅がない限り、強制的な立ち退きの拒否を前提とするものであった。分裂によって1990年に「住宅権利協会 DAL(Droit au logement)」が誕生した。住宅権利協会は支持者(ACI^⑥といった団体、SUDのような組合、ピエール神父^⑦やレオン・シュワルツェンベルグ^⑧のような個人、さらには政党があるが、権利協会の独立性は維持されている)を拡大して、さまざまな活動を媒介し、「徴用法」^⑨の適用を支持するため裁判を行っている。住宅権利協会と「ホームレス会議 CDSL(Comité des sans logis、1993年に単身者のために創設されたホームレス会議)」が協力してリードした活動は、その力を高めて住宅問題を政治課題とすることに成功するまでになった。ドラゴン通り7番にあった空き住宅の新たな占拠や、(1995年4月8日に2万人から3万人が集った)^⑩「排除と不安定雇用に抗する」大規模なデモのおかげで、住宅問題という主題は1995年の大統領選挙期間中に注目を集め、ジャック・シラク候補は「社会の破壊」(Chauvière et Duriez, 1995)を告発するまでに至った。数十、数百の住宅の徴用が、フランス国内にある数十万戸の空き住宅に決定された……。

適当な住宅を持つ権利の万人への適用を要求することで、フランスやその他の地域の「ホームレス sans-logis、sans-toit」は、社会空間に必要最低限の場所の領有を求めたのではないだろうか。しかも住宅権利協会の加盟者、より一般的に住宅困窮者の大部分が移民であるとしたら、それは無視できない問題である。移民の多くは北アフリカ出身者であり、そこには「滞在許可書を持たない人々」も含まれている。各団体および専門家は、住宅の諸条件と他の排除形態の間、より正確には不平等と差別の間に存在するきわめて強いつながりを強調する。空間の領有を妨害して、何も持たない人々を誰も望まない最も劣悪な環境にある隙間の空間や周辺空間へと放り出すために、資金不足に加えて法律と肌の色が利用されているのである。この人たちが「フランス国土」にまだとどまることができるとしたらであるが。強制立ち退きから「国外追放」に至るまで、外国人労働者はこの点で禁じられた領有の一種のパラダイムを代表している。外国人労働者のある人々

にとって、フランスに住むことは自分の家を持つことと同義ではなく、この点について空間の「実存的」な領有形態の否定による定義でもある「家族のいない家」に関するアドベルマレク・サヤドの論文を読むことができるだろう(Sayad, 1980)。

以上から、地球とその資源の法的(あるいは法的に保証された)領有は、現代の闘争の重要な賭金になっていると結論づけられる。諸個人と集合体の「存在 l'être」に寄与する以前に、領有はその存在それ自体を条件づけている。「実存の諸手段」(Mésini, 2002)を所有する人々としらない人々の間に大きな社会分割を設けることによって、領有は、所有者の存在…と「非-存在 non-être」、つまり非所有者という社会的権利の喪失者(この人たちは自分たちを「持たざる sans」と呼ぶ傾向がある)の原因となる。しかし、**あたかも社会全体が、所有すること l'avoir、つまり終りも目的性もない蓄積の狡猾な手段となる排他的かつ私的な所有によって、(社会的)存在をより高く評価することに基づいているかのよう**に、**あらゆることが行われているのである**。だがそれが不可避であると言うのではない。なぜなら、実際に社会運動、とりわけ「もうひとつの世界主義者」は、まさにこの状況を変えようとしているという理由に加えて、理論的観点からも本質主義的な用語に対する不信が高まっているからである。この用語は、それが描写するつもりのこと、つまり私的所有に基づく地位、生活条件、さらには存在への権利の不平等を承認(それゆえに正統化)してきた。

集合行為のレパトリのなかの空間の領有

空間の領有という問いは、賭金あるいは権利要求に関してだけ問われるわけではない。空間は異議申し立ての外部にある対象ではない。社会運動は、それが大文字の歴史でないとしても、出来事を創出するためにどこかで起こる…。したがって、「社会運動」あるいは文字通り「共同動員」という表現を取り上げることに発見的な意義がある。なぜなら、これらの表現はまず、「反逆する」身体の運動化を意味するからである。それゆえに、最初に行われるべきことは、集合的行為と社会紛争に、その実践および(「生きられた」と「実験」という二重の意味の)経験の特徴と同時に、物質的(物理的)次元を(再)付与することである。そして物質(物理)的空間の外で何も起こらないこと、あらゆることが身体を経

由すること、という二つの命題から出発することである。ところで、あらゆる空間は同じ価値を持たないし、等しく接近できない。すべての実践(「空間的」と言えるかもしれないが、実践はすべてそうである)は、等しく有効でもなければ正統化されないなど。

したがって、こうした観点から集合的行為とその可能性の条件の空間的次元とは何だろうか。より正確には、空間の領有と集合的行為の出会いほどのような結果をもたらすのだろうか。前述したさまざまな運動の行為のレパートリーの中心には、空間の物質的であると同時に象徴的な集合的領有の諸形態(すべてを奪われた農民による土地への侵入、空き住宅の収用と占拠(「スクウォッター」)、公共空間での違法なキャンプなど)がある。特に物質的な緊急性ゆえに、いくつかの行為はその目的と混同され、その手段は成果と混同されると言えるだろう。だが、地表面の領有と直接には結びつかない別の賭金(失業、金銭など)に関わるような、その他の動員はどうなるのだろうか。こうした行為は領有の諸形態なのだろうか。こうした問いに答えるために、法的所有(あるいは「公式の領有 *appropriation formelle*」)を別にして、「領有」によって意味されていることをもう一度知る必要がある。個人的な省察とともに、諸社会科学におけるこの表現の利用について一瞥することで、観察された行為に固有の問題圏に通じる複数の意味の束を引き出すようにしよう⁹⁾。

空間の排他的占拠と管理

領有という表現のうちで最も流布している用法のひとつは、おそらく排他性／私有化という対の方から探られるべきであろう。領有がまず関連する物質的な「物」あるいは「財」への関係を表現しているように思われるとしても、それは社会関係と切り離せない。所有権と同様に、領有という概念はまず、その理由や方法はなんであれ、ある財にあれこれの利用(その消費、徴収、販売そのほか)を予め付与して、それを他者から奪うことを意味している。空間の必然的な排他的占拠(全員の場合がない時)の場合、物質的管理を付け加えねばならない(個人あるいは集合的な行為者がその空間への他者のアクセスを制限、禁止する時)。この(物質的)領有の視角は、社会紛争の主役にとっておなじみのものにすぎない。この人たちにとって、空間は異議申し立て者と体制側(そして／あるいは警察・治安維持部隊

forces d'ordre)の間で、時に「血まみれの」権力関係の対象となる。しかし、集合的行為は空間の領有の諸形態であると言えるだろうか。

目的があろうがあるまいが、ただ集るだけで、人で埋まった公共空間へのアクセスやそこでの別の実践はしばしば不可能になってしまう。これは周知の経験である。たとえば路上でのデモ、さらには道路の「遮断」が、完全に流れを止める障害としてよりも、ろ過器として機能する場合が多いとしても、他の利用者たちの循環に重大な結果をもたらさないわけではない。警察は「予防線」に姿を変えて、「要注意」と考えられた区域の通行とアクセスの禁止をその使命とするようになる。そして警察はしばしばきわめて厳格な方法でそれに成功する¹⁰⁾。つまり路上の闘いと路上のための闘いは、(とにかく多くの人々にとって)もはや「宮殿の占拠」が目的ではない民主主義においても、社会紛争の重要な戦術の一側面となっているのである。しかしフランスのような民主主義国家においてさえ、異議申し立てをする集団あるいは、たとえば新しい「危険(と考えられた)階級」である若者たちなど、社会に混乱をもたらすと考えられている他の逸脱者たちにとって、「路上への権利」はおそらく最も脆弱な権利のひとつである(*Collectif contre la répression*, 2000; *Hubrecht*, 1990; *Langlois*, 1979)。

より直接的には、まだ「占拠」という行動が関係している。一般的にこの行為は、公共空間ではなく、反対すべき活動の拠点となっている(公的あるいは私的な)建物という場で生じる。歴史的にこの行為形態は労働者の闘争において現れる(フランスでは特に1936年)。スト参加者は自分たちが働く工場を占拠して、(その設備の保守と)作動を妨害する。「ストライキのピケ」は、ストに参加しない人たち(そしてスト破りの人々や泥棒)のアクセスを妨げるため、入り口の前に設置された。スト参加者は生産手段を領有しないとしても、労働者はしばらくの間、機械の本当の主人となった。その後、こうした行為形態はその他の社会カテゴリーや社会集団へと広がっていった。たとえば、「自分たちの」大学を占拠した1968年5月の学生たち。現在の多くの運動にとって、占拠された場所はおもはや異議申し立て者が活動する場ではなく、行政の場となっている。敵対者としてあるいは、紛争の調停者¹¹⁾として、国家が重要な標的となった。占拠は活動家によってますます「象徴的」と形容されるようになっていく。したがって賭金は、敵対者、(時に混乱した)政治権力、「世論」の呼びかけのなかにある。あるメッセー

ジを伝達させるために、出来事を創出することが重要となる。しかしこれは、活動家たちが場所に現れないこと、局所的な活動を妨害しないこと、場合によっては場所へのアクセスを禁止しないこと、警察によって退去させられないことを意味しない！それゆえに象徴的であろうとなかろうと、いずれにせよこうした状況のあり方においてさえ、物質的領有について語ることができる。この領有形態は不安定かつ一時的である。集合体が散りじりになる時、この形態もただその姿を消すだけである。

流用と自立的利用

したがって、とりわけ広く用いられている流用 *détournement* や自立的利用の諸形態という空間領有の別の一連の意味は、暫定的なものである。所与の社会・空間秩序に対するオルタナティブな実践として、空間のあらゆる流用は、とりわけそれが集合的で制度化されていないとしたら、異議申し立てあるいは秩序の転覆を意図した行為となる（そうした行為と考えられる）傾向がある（Corbin et al., 1994）。（人あるいは車両の）循環に関わる空間の領有として、路上の行為は（事実的あるいは自発的な）流用形態と考えることができる。まして、さまざまな占拠は多くの場合に流用形態に属するが、それは「通常の」活動を妨害するという理由にすぎない。しかし、こうした異議申し立ての行為は、その言葉が適切ならば、特に本来の意味で日常を超えた、通常とは異なる実践の機会となる。つまり政治論争、集会、戦闘資材の準備、集合的な食事と休息、お祭り騒ぎやハンガーストライキなど。

勝手気ままに、無料で行われるような制約を受けない戦闘的で政治的な活動のために、特に用意された場所が存在しない時、流用は日常的で必然的な実践となる。この点で、**アゴラ**は逆説的であるが「都市国家 *cit  *」の空間組織の（相対的に）大きな不在であり、民主主義社会においてもそうである。もし「路上への権利」がきちんと確立された獲得物でないとしたら、またもしその正統性と合法性が常に疑問視される恐れのある獲得物（一般的にそうである）であるとしたら、路上への権利が行使されるのは社会的無秩序の名の下である。つまり公共空間におけるすべての集会は、常に「公共秩序への障害」として考えられる恐れがある。フランスにおいてデモは、知事の事前許可¹²⁾と自己規制の形態によっ

てのみ許可される。デモ参加者の隊列自体から「警備担当者 *service d'ordre*」が誕生する（Cardon et Heurtin, 1990）。したがって、隊列を指揮し、多少とも自然発生的に生じる秩序の乱れを防ぐその能力を証明する以前に、身元を確認された組織者が求められるのである。いたるところでデモ参加者の自由はまったく相対的であり、きっちりと枠をはめられ、監視されているにすぎない。こうした理由で、異議申し立て側が（その条件のひとつである）空間とその利用の流用を物質的に管理している時でさえ、自立的利用を語ることはしばしば微妙な問題となる。

確かにフランスでは長年にわたって、許可書の申請はもはや組織者によって組織的に行われていない。とりわけ小規模な行動やパリ以外の行動では申請は行われない。なぜなら、警察がとにかく事情に通じているか、反対に秘密活動が重要になっているか、あるいはまったく別の理由からそうになっているのである。さらに68年5月と「対抗文化」という理念以来、そしてその理念とともに、オルタナティブと定義される諸実践は、たとえ権利要求（スクウォーターやお祭り騒ぎなど）をしていなくても、活動領域として流用と自立的使用をしばしば獲得してきた。そして時に、アナーキストのハキム・ベイ（1997）によって理論化された「一時的自立圏 *TAZ (zones autonomes temporaires)*」そして／あるいは「街路を取り戻す *Reclaim the Streets*」（イギリス）、「正義と仕事 *Jobs with Justice*」（アメリカ）、「ブラック・ブロック *Black Blocks*」（Aguiton, 2001; Losson et Quinio, 2002; Starhawk, 2003）といった「もうひとつの世界主義者」たちの運動など、多くの重要な集団の行為のレパートリーによって、それは明示的なものとなる。しかし、こうした実践を解釈することはむずかしい。この実践は、一時的にせよ自由意志に成功したのか、あるいはそれが告発する疎外の徴候なのだろうか。確かなことは、個人の自立性がもし可能であるとしても、それはここで集合的に獲得される場合にのみ可能になるという点である。

自分の場所をもつこと：異議申し立てを行う諸集団のための資源

それにもかかわらず、相対的に自立可能なこの空間が一時的な活動時間を克服しうることも確かである。集合体の活動は権利要求の行為に還元されない。その「日常」活動の大部分は、さまざまな出会いと集まりから構成されている。それは機能的あるいは

懇親的、(一般的あるいは縮小された)内部あるいは公共の、単独あるいは他の集合体との、出会いと集まりである。空中に漂っていること、あるいは単独でいること(たとえ時にはそうなるとしても)を想像することはむずかしい。こうした集まりのいくつかをリードするだけでなく、共有財を作成して保管する、あるいは「恒常的なもの」(つまり外部に開かれており、誰でも対面的に簡単に接触することができるもの)を創出するためには、集団に固有の事務所、部屋を持つことがより実践的である。インフラストラクチャーという理由のみならず、経済的かつ(敵対的な市町村行政という)政治的な理由から、時にはこの不可欠な出会い、都市中心部やもっと大きな部屋にたどりつくこと、そしてわずかな費用で事務所を構えることさえきわめて困難となる。さらにこうした場所は常に合法化・制度化されるとは限らない。ドラゴン通り7番の占拠の際、ホームレス連合は、恒常性と出会いのために多数の他組織を受け入れて、「連帯の家」を開くことに決めた。だが、この再住宅化(と勝利)によって、ホームレス連合は別の場所を捜し求めざるを得なくなる。それが12区の新しい建物の占拠で創出された「みんなの家」であろう。この闘争によって開かれた場所は、たいてい最も集団的であり、また最も不安定なものでもある。

したがって、ある集合体にとって、自分の場所を持つこと、近づきやすい部屋を持つこととは、相対的に自立した方法、つまり好みの仕方、望む人と、望む時にそれを利用できることである。利用に際して前もって許可を求める必要もなく、多少前に予約する必要もない。それは望んだ時に利用することができ、予想されなかった出来事との関係ですばやく対応することができる。こうした固有の場所を持つことは、その利用のリズムと固有の時間をコントロールすることである。象徴的な視点から、それはまたより物質的かつ正統的な仕方で存在することでもある。つまり、社会空間に自らの場所を作り出すこと(さもないければ「自分の家を持つこと *pignon sur rue*」)である。そして、占拠された場所はしばしば社会階層における地位という考えを生じさせることになるが、だからといって中心に居ることは、いつも最も関与する立場にあるとは限らないし、あらゆる視点を持つわけでもない。つまりすべては、誰と近くにいたいのか、誰と出会い、誰を代表(表象)したいのか、に依拠している。なぜなら、みんなが「中心」(都心、大学など)を作るわけではなく、中心は真の「象徴的な引き立て役」にもなりうるからである。

イデンティテール

空間の自己同一性の自己による付与：象徴資本の空間的次元？

ここで、一時的な行為の時間枠を克服しうる別の領有形態に触れておこう。純粋な象徴的行為の重要性は誰も否定しえないし、おそらくその重要性は増してさえいるだろう(Champagne, 1990)。またすべての異議申し立ての行為が展開される象徴的条件とその空間的次元の重要性も否定できない。アプリオリに最も道具的な行為は、世界とその行為を担う運動によって、常に何かを表現しなければならない。ダニエル・タルタコウスキー(そして彼の引用するルイ・マラン)によれば、デモは、象徴的なものに属しているという点で、「場所や日時を選ばず無差別にそれが展開されることを禁じる諸関係の空間および時間と結びついている。(…)こうした表出と行為の形態は、あらゆる都市がそうであるように、この結晶化された歴史を通して展開されるので、(あらゆるスローガン・命令を冗長だが、明示化し可能にする)複雑でコード化された言語活動としても理解されねばならない。記号学者ルイ・マランの言葉によれば、この形態は、神話を再現実化する、あるいはおそらくより正確には、ある物語を語る、またその伝説を読むために与えられるテキストを書き込むという過程のなかに組み込まれることで、その空間を構築するのである」(Tartakowsky, 1997、強調は著者による)。ところで、象徴的視点から、いつから空間の領有を語るができるのだろうか。空間を領有するためには、それを象徴的に占拠し、印付けさえすれば十分なのだろうか。

個人あるいは集団の社会的実践(印付け、言説その他)が、独占的な権利を目的として、地表面の一部分を用いて広くその価値を高めるような持続的アソシエーションの関係を社会的に構築し、再認することを目指して競争する時、個人あるいは集団による空間の「象徴的」あるいは「自己同一的」¹³⁾な領有の過程／戦略が存在すると考えられる。言い換えると、空間の領有とは、ここでそれが資源あるいは象徴資本として利用されることで、空間を新たな自己同一性の属性として統合することであろう(Bourdieu, 1977; Ripoll et Veschambre, 印刷中)¹⁴⁾。こうした視角の下で、論理的には空間の象徴的・自己同一的な領有の二つの様式が存在する。つまり、既に存在する象徴的な場を集団の自己同一性に統合すること(名所や記憶の場など)、あるいは集団自身の手によって、直接的に集団に寄与する新しい

象徴的な場所を生産することである¹⁵⁾。各様式は、その利点と同様に固有の困難を持っているように思われる。既存の、すでに一般的に領有されている象徴的な場(あるいは場・象徴)を領有するために、「権利を有するもの」あるいは「継承するもの」として、すなわちその場の「創始者」あるいは「保有者」であり、またかつてそうであった集団の構成員として自己を提示する。したがって、系譜と伝統のなかにみずからを書き込み、過去の闘争の「集合記憶」を活性化(再構築)することが重要である。以上のことは、再認(再解釈さえ)された規則と価値に順応することや、場合によっては競合状態となる継承者をめぐる競争に加わることを意味している。したがって、各々は排他的な正統性を要求し、その他のあらゆる領有戦略を横領者として告発する。もうひとつの可能性は、無から新しい場・象徴を創造することである。しかし、検証すべき仮説は、この新たな標章の生産はその支配が困難なので、なおさら象徴の充填が重要になるということである。最も強力な正統なシンボル、歴史的な大事件は、創始者によってしか創出することができないので、ある集団が単独でそれを実現することはむずかしい。こうした条件の下で、その独占を要求すること、あるいはそこから特別な利益を引き出すこと(たとえ、そこから望ましくないものを引き出すことはより容易であるとしても)は、困難である。また、あらゆる印付けから「真っ白な状態の」空間に新しい場・象徴を創出する試みを論理上は考えられるとしても、出来事は中心地やすでに象徴性を帯びた場で象徴的な力を獲得するという別の潜在的な困難も存在する。中心地や象徴性を帯びた場はまさに(時に飽和状態にいたるまで)象徴を最も充填されており、それと明確に区別される創造は容易ではない。

奇妙なパラドクスによって、周辺的なものの周辺であるラルザック¹⁶⁾は、「もうひとつの世界主義者」運動の(フランスの)首都として、パリと競争状態になっている。ラルザックは、何度も多くの人々を動員してきたことから、その組織者たちさえ驚かせている名所として高く評価されており、これらの運動の創造、その評価の向上、統一のための場となっている。記憶の場、つまりこの運動をラルザックにおける1970年代の運動を継承するものにしようとする象徴的遺産は、運動家たちの組織化と具体的な出会いの場所、つまりある世代の実践と価値の伝達に多少とも成功した場所にもなった。その重要性ゆえに、ラルザックは、すべての立役者たち(異議申し立て者あるいは組織のメンバーであろうとなか

うと)の間の権力関係の資源と賭金となった。そして、この立役者たちは、「もうひとつの世界主義者」運動の正統的な諸形態であるのみならず、その境界の定義、つまりラルザックが創造し領有する、あるいは受容不可能として拒絶する、活動家の自己同一性の定義に関与している。2003年夏の集会(「持たざる者 sans」の結集から生まれた「No vox」の活動家による権利要求の活動)の際、社会党の立場の分解は、それがもたらした議論にもかかわらず、アイデンティティの領有が、社会運動の構築と同時にそれが担う正統性と意味作用に役買う重要な賭金であることを示している。

多くの点で、このきわめて大雑把な初歩的分析について結論づけるべきことはないが、これを発展、充実、変容させることには意義があるように思われる。ともかく、空間の領有の諸形態、その賭金と可能性の条件に関するこの考察は、さまざまな分割、社会に遍在する権力関係さらには紛争、そして同時に既存の秩序への異議申し立ての社会運動を強調すれば十分である。そうすることで、その複雑さゆえに、以上の考察は、「全体論のレトリック」、つまり「その」領域を領有する諸社会に関するグローバルかつ機能主義的な言説に対してもつべき疑念を示しているのである(Ripoll et Veschambre, 2002)。

注

- 1) 本稿は、*Travaux et documents de l'UMR CNRS ESO* (Ripoll, 2001, 2004) で発表された考察に続くものであり、*La dimension spatiale de l'action collective et des mouvements sociaux* に関する現在作成中の学位論文に依拠している。
- 2) 特に、M. Beaud et al. (1999)、M. Chesnais et al. (2001)、D. Clerc (2004)、L. Carroué (2004)、B. Marris (2000、avec P. Labarde; 2003) を参照。また Attac(Cassen et al., 1999) によって出版された最初の論文集や、R. Passet (2000) と D. Plihon (2001) の研究、あるいはかつてビル・クリントン政権の顧問を務め、世界銀行の副総裁と主席経済学者のポストを辞職したノーベル経済学賞受賞者の J. Stiglitz (2002) の著作も参照のこと。
- 3) フランス革命によって実施された国有財産の売却は、確かにわずかな土地の獲得の可能性を増大させた。「大部分、こうした土地を獲得したのは貴族と大ブルジョワである。それにもかかわらず、中小農民、さらに日雇いの農村プロレタリアートはこの土地の一部を自分のものにすることができた。広大な領地に対してしばしば猫の額ほどの小区画であったが、それによって貧しい人々は、多大な努力と引き換えに、農村からの移住を避けるため

- の基盤を手に入れることができた。…いたるところで、農村工業のおかげで生じたわずかな貯えも土地の購入に投資された。」(Noiriel, 1986)。
- 4) Alexis de Tocqueville, 《De la classes moyenne et du Peuple》(1847), dans *Euvres I*, La Pléiade, Gallimard, 1991, p.1323-1324. P. Chanial (2000) による引用。
 - 5) 多くの研究があるが、T. Andréani et al. (1999)、R. Petrella (1997)、J. Ziegler (2002) を参照のこと。また雑誌 *Mouvements*, *ContreTemps*, *Transversales*, *Revue du MAUSS* も参照のこと。
 - 6) チコ・ヴィセンテは、地理学者で CUT/RS (Centrale unique des travailleurs/Rio Grande do Sul 労働者の比類なきセンター/リオ・グランデ・ド・スル) の委員長を務め、ブラジル ATTAC の活動家でもある (Collectif, 2000)。ブラジルにおける民衆運動の沿革に関しては、Da Silva (2000) を参照のこと。
 - 7) フランソワ・デュフル (フランス農民同盟とヴィア・カンベシナインターナショナルの創始者で主要人物のひとり、ATTAC の副委員長) へのインタビュー (*Mouvements*, 2003)。ヴィア・カンベシナは約 80 ケ国からほぼ 100 の組織と数千万人の農民を集めている (農民のうち、インドの KRR (カルナタカ州農民組合) だけで 1 千万人である)。
 - 8) 1945 年 10 月 11 日の決定により、知事は「6 ヶ月以上居住されていない公共住宅あるいは個人住宅、別荘あるいは本宅、専門の事務所」を収用でき、「…差し押さえは 1 年後、修繕は 4 ヶ月後に可能となる。」(Péchu, 2002)
 - 9) この主題は、長期間のフィールド調査 (現場での観察、参与観察、資料観察) に基づいている。ここで分析の手続きにとどまるとしたら、現実において明らかに切り離すことのできない諸要素を接合しなければならないだろう。また基本事項である領有という言葉のより「心理学的な」(認知的、情動的など) 使用についても、紙幅のため触れない。
 - 10) 特に催涙ガスは、デモ隊を跳ね返し、一定の距離を維持して、追い払うためによく利用される。催涙ガスによって (呼吸ができなくなるため) 環境の生態的な特性が変化することで、その空間はほとんど接近不可能となり利用できなくなってしまう。
 - 11) 集団は、時にそれ自体で社会的に再認識された活動の場所をもたない。失業者や不安定雇用者などは、特に「社会的処遇」(国立雇用機構 ANPE、商工業雇用協会 ASSÉDIC の支部など) に関わる場所を占拠してきた。
 - 12) 組織者の名前、時間割、集合場所、行進経路を当局に届ける義務。
 - 13) 通常、「象徴的領有」という表現を用いる場合、この様式と別のいくつかの用法、とりわけ所有の象徴化、つまり (演劇様式に基づく) 架空の領有を刺激する表象あるいは、現実的領有を表すがその外側に存在する表象と混同される危険性があるだろう。

- 14) したがって、領有は象徴的あるいは自己同一的な付与の特別なケースである。自己付与の場合と対立するのが割り当て *assignation* である。つまり他者によって正あるいは負 (スティグマ化) の自己同一性の属性が割り当てられることがある。しかし領有について語ることは、ともかく領有を自らの手に奪い返すこと、そして最もうまくいけば、(各人が可能な限り高い評価を望むような) 自己の表象と定義に積極的に関与することを意味する。スティグマの内面化は象徴的暴力の適切な定義であるように思われるので (Bourdieu, 1993)、領有という言葉を他律性や疎外という考え方で共存させることは困難である (撞着語法に類似する対照)。しかし、これはもはや単なる語彙の問題でなく理論上の問題であり、語るのはかなりむずかしい…。
- 15) それは時に、ベルナル・デバルビュ (1995, 1996) によって言及されたのと同じタイプの象徴的な場所であり、換喩的な過程が重要であるとしても、そのアプローチには重要な相違がある。デバルビュ (1995) は、「領域とそれを作り出す集合体をコノテーションによって示そうとするレトリックな構築物として、象徴的な場所」を研究する。ここではむしろ、たとえそれぞれの集合体が全体性を代表する (一般利害を守る) と主張するとしても、社会的集合体の一部のみと、その集合体のさまざまな部分間の闘争が重要となる。この集合体の「領域」表象に関しては、とりわけ社会運動にとってほとんど体系化されていない関心事である。

訳注

- (1) Association pour la taxation des transactions pour l'aide aux citoyens. 市民を援助するために金融取引に課税を求めるアソシアシオン。1998 年にフランスで設立された国際機関。
- (2) Solidaires, Unitaires et Democratiques-Postes, Télégraphes et Téléphones. 郵便・電信・電話の連帯・統一・民主労働組合。
- (3) Ligue communiste révolutionnaire. 革命的共産主義同盟。
- (4) Agir ensemble contre le chômage. 反失業共同行動。1993 年に結成。
- (5) スペイン語で「農民の道」という意味。
- (6) 国際的な慈善活動を組織し、難民やホームレスなどの支援を行う。
- (7) ガン研究者で、サン・パピエやホームレスなどの支援を行う。
- (8) 中央高地南端のコース地方に位置する地域。1971 年フランス政府による基地拡張に対して農民が反対運動を展開し、10 年後にミッテラン大統領は計画を取り消した。2003 年にはフランス農民同盟などの呼びかけで、「もうひとつの世界化」運動の一大集会が開催された。

文献

- AGUITON (C.), 2001. *Le monde nous appartient*, Paris, Plon, 251 p.
- ANDRÉANI (T.), BARON (A.), CLAIR (L.), LE PORS (A.), ROVÈRE (M.), SALESSE (Y.), 2002. *L'appropriation sociale*, Paris, Syllepse, coll. « Les Notes de la Fondation Copernic », 126 p.
- ATTAC, 2000. *Tout sur Attac*, Paris, Mille et Une Nuits, coll. « Les petits livres », 127 p.
- BASCHET (J.), 2002. *L'étincelle zapatiste. Insurrection indienne et résistance planétaire*, Paris, Dcnoël, 286 p.
- BEAUD (M.), 1990. *Histoire du capitalisme de 1500 à nos jours*, Paris, Seuil, 383 p.
- BEAUD (M.), DOLLFUS (O.), GRATALOUP (C.), HUGON (P.), KÉBABDJAN (G.), LÉVY (J.), 1999. *Mondialisation. Les mots et les choses*, GEMDEV -Groupe mondialisation, Paris, Karthala, 358 p.
- BEY (H.), 1997. *TAZ. Zone autonome temporaire*, Paris, Éditions de l'éclat [www.lyher-eclat.net/lyher/taz. html].
- BOVÉ (O.) (avec la collab. de Gilles Luneau), 2002. *Paysans du monde*, Paris, Fayard, 475 p.
- BOVÉ (J.), DUFOUR (E.), 2001. *Le monde n'est pas une marchandise. Des paysans contre la malbouffe*, entretiens avec Gilles Luneau, Paris, La Découverte, 340 p.
- BOURDIEU (P.), 1993. « Effets de lieu », dans BOURDIEU (Pierre) (dir.), *La Misère du monde*, Paris, Seuil, p.159-167.
- , 1997. *Méditations pascaliennes*, Paris, Seuil, 318 p.
- BBUNET (R.), FERRAS (R.), THÉRY (H.) (dir.), 1993. *Les mots de la géographie. Dictionnaire critique*, Paris, Reclus/La Documentation française, 518 p.
- CARDON (D.), HEURTIN (J.-P.), 1990. « 'Tenir les rangs'. Les services d'encadrement des manifestations ouvrières (1909-1936) », dans FAVRE (Pierre) (dir.), *La Manifestation, Paris*, Presses de la FNSP, p. 123-155.
- CARROUÉ (L.), 2004. *Géographie de la mondialisation*, Paris, A. Colin, coll. « U Géographie », 256 p.
- CASSEN (B.), HOANG-NGOC (L.), IMBERT (P.-A.) (coord.), 1999. *Contre la dictature des marchés*, Paris, La Dispute/Syllepse/VO, 155 p.
- CASTEL (R.), 1995. *Les métamorphoses de la question sociale. Une chronique du salariat*, Paris, Gallimard, coll. « Folio-essais », 813 p.
- CASTEL (R.), HAROCHE (C.), 2001. *Propriété privée, propriété sociale, propriété de soi. Entretiens sur la construction de l'individu moderne*, Paris, Fayard, 215 p.
- CASTELLS (M.), 1975. *Luttes urbaines et pouvoir politique*, Paris, Maspéro, 123 p.
- CASTORIADIS (C.), 1973. *La Société bureaucratique, 1 : Les rapports de production en Russie*, Paris, UGE, 317 p.
- , 1999. *L'institution imaginaire de la société*, Paris, Seuil, 541 p.
- CHAMPAGNE (P.), 1990. « La manifestation comme action symbolique », dans FAVRE (Pierre) (dir.), *La Manifestation*, Paris, Presses de la FNSP, p. 329-356.
- CHANIAL (P.), 2000. « Solidaires ou citoyens? Jean Jaurès et les équivoques de la propriété sociale », *Mana*, n° 7 : « France/Brésil. Politiques de la question sociale », premier semestre, p. 45-70.
- CHAUVIÈRE (M.), DURIEZ (B.), 1995. « Droit au logement contre droit de propriété. Les squatters dans la crise du logement », *Annuaire de la recherche urbaine*, n° 66 : « Régularisations de propriétés », mars, p. 88-95.
- CHESNAIS (F.), DUMÉNIL (G.), LÉVY (D.), WALLERSTEIN (I.), 2001. *Une nouvelle phase du capitalisme!*, Paris, Syllepse, 125 p.
- CLERC (D.), 2004. *Déchiffrer l'économie*, Paris, La Découverte, coll. « Poche Essais », 414 p.
- COLLECTIF (en collaboration avec ATTAC et l'AITEC), 2000. *FMI: les peuples entrent en résistance. Témoignages de Colombie, Afrique du Sud, Île Maurice, Brésil, Corée du Sud, Algérie*, introduction d'Éric Toussaint, Genève, CETIM, 144 p.
- COLLECTIF CONTRE LA RÉPRESSION, 2000. *Répressions. La cagnotte et le bâton*, Paris, L'Esprit frappeur, 157 p.
- ContreTemps, 2001. n° 2 : « Seattle, Porto Alegre, Gênes. Mondialisation capitaliste et dominations impérialistes », septembre, Paris, Textuel, 186 p.
- ContreTemps, 2002. n° 5 : « Propriétés et pouvoirs », septembre, Paris, Textuel, 199 p.
- CORBIN (A.), GÉRÔME (N.), TARTAKOWSKY (D.) (dir.), 1994. *Les Usages politiques des fêtes aux XIXe-XXe siècles*, Actes du colloque de Paris des 22-23 novembre 1990, Paris, Publications de la Sorbonne, 440 p.
- CRETTEZ (X.), SOMMIER (I.) (dir.), 2002. *La France rebelle*, Paris, Michalon, 569 p.
- DA SILVA (A. A.), 2000. « Reconnaissance d'un problème public, conquête d'un droit social? Le mouvement des "sans toit" dans les villes brésiliennes », *Mana*, n° 7 : « France/Brésil. Politiques de la question sociale », premier semestre, p. 111-130.
- DEBARBIEUX (B.), 1995. « Le lieu, le territoire et trois figures de rhétorique », *L'Espace géographique*, n° 2. p.97-112.
- DEBARBIEUX (B.), 1996. « Le lieu, fragment et symbole du territoire », *Espaces et Sociétés*, n° 82-83, p. 13-35.
- DUBET (E.), 1992. « Comment devient-on ouvrier? », *Autrement*, n° 126 : « Ouvriers, ouvrières. Un continent morcelé et silencieux », janvier, p. 136-145.
- DUCLOS (N.), 2002. « La rébellion paysanne », dans CRETTEZ (Xavier), SOMMER (Isabelle) (dir.), *La*

- France rebelle*, Paris, Michalon, p. 121-148.
- ÉLIAS (N.), 1990. *La Dynamique de l'Occident*, traduit de l'allemand par Pierre Kamnitzer, Paris, Presses-Pocket, 320 p.
- ESO. *Travaux et documents de l'UMR 6590*, 2004. -séminaires «Appropriation» et «Habitat et stratégies résidentielles», n° 21, mars, Nantes, 158 p.
- FILLIEULE (O.), PÉCHU (C.), 1993. *Lutter ensemble. Les théories de l'action collective*, Paris, L'Harmattan, 221 p.
- FRÉMONT (A.), CHEVALIER (J.), HÉRIN (R.), RENARD(J.), 1984. *Géographie sociale*, Paris, Masson, 381 p.
- HARVARD-DUCLOS (B.). 2000. -«Action militante et question sociale: le mouvement Droit au logement» en France dans les années quatre-vingt-dix», *Mana*, n° 7 : « France/Brésil. Politiques de la question sociale », premier semestre, p. 131-148.
- HOBBSAWM (É. J.), 1999. *—L'âge des extrêmes. Le Court Vingtième Siècle. 1914-1991*, Bruxelles, Complexe, 810 p.
- HUBRECHT (H. G.), 1990. -« Le droit français de la manifestation », dans FAVRE, (Pierre) (dir.), *La Manifestation*, Paris, Presses de la FNSP, p. 181-206.
- LACOSTE (Y.), 1976. *—La géographie, ça sert, d'abord, à faire la guerre*, Paris, Maspéro, 190 p.
- LABARDE (P.), MARIS (B.), 2000. *—La Bourse ou la vie. La grande manipulation des petits actionnaires*, Paris, Albain Michel, 189 p.
- LANGLOIS (D.), 1979. *Nouveau guide du militant*. Paris, Seuil, 316 p.
- LATOUCHE (S.), 2004. *—Survivre au développement. De la décolonisation de l'imaginaire économique à la construction d'une société alternative*, Paris, Mille et une nuits, coll. « Les Petits Livres », 127 p.
- LÉVY (J.), 1996. *—Le monde pour Cité, débat avec Alfredo Valladao*. Paris, Hachette, 143 p.
- LOSSON (C.), QUINIO (P.), 2002. *Génération Seattle. Les rebelles de la mondialisation*, Paris, Grasset, 316 p.
- MARIS (B.), 2003. *—Antimanuel d'économie*, Bréal, Rosny, 358 p.
- MARX (K.), 2001. *—L'expropriation originelle*, traduit de l'allemand par Jean-Pierre Lefebvre, présentation de George Labica, Paris, Les Nuits rouges, 118 p.
- MÉSINI (B.), 2002. -« Une terre, un toit: une lutte planétaire. Appropriation des moyens d'existence dans les villes et les campagnes », *ContreTemps*, n° 5 : « Propriétés et pouvoirs », septembre, p. 61-72.
- Mouvements*, 2003. -n°25. Dossier: « Seattle, Florence, Porto Alegre. L'autre mondialisation », janvier-février, Paris, La Découverte, 176 p.
- Mouvements, Transversales science/culture* (dir.), 2003. *—Où va le mouvement altermondialisation ? ... et autres questions pour comprendre son histoire, ses débats, ses stratégies, ses divergences*, Paris, La Découverte, 127 p.
- NEVEU (É.), 2002. *—Sociologie des mouvements sociaux*, Paris, La Découverte, 125 p.
- NOIRIEL (G.), 1986. *—Les ouvriers dans la société française XIXe-XXe siècle*, Paris, Seuil, 320 p.
- ORY (P.) (dir.), 2000. *—Nouvelle histoire des idées politiques*, postface de René Rémond, Paris, Hachette, 832 p.
- PASEET (R.), 2000. *—L'Illusion néo-libérale*, Paris, Fayard, 287 p.
- PÉCHU (C.), 2002. -« Les "sans-logis" », dans CRETTEZ (Xavier), SOMMER (Isabelle) (dir.), *La France rebelle*, Paris, Michalon, p. 281-301.
- PETRELLA (R.), 1997. *—Le bien commun. Éloge de la solidarité*, Lausanne, Page deux, 117 p.
- PLIHON (D.), 2001. *—Le Nouveau capitalisme*, Paris, Flammarion, coll. « Dominos », 128 p.
- RIPOLL (F.), 2001. -« Lieu(x) et action collective. Éléments de discussion, ébauche de problématique », *Eso. Travaux et documents de l'UMR 6590*. n°16, Dossier: séminaires « Lieu(x) » et « Comparer », octobre, Nantes, p. 23-39,
- RIPOLL (F.), 2004. -« L'appropriation de l'espace au regard des "mouvements sociaux" contemporains: quelques éléments de réflexion sur les enjeux, modalités et ressources de l'action », *ESO. Travaux et documents de l'UMR 6590*, n°21 : Séminaires «Appropriation» et« Habitat et stratégies résidentielles », mars, Nantes, p. 45-50.
- RIPOLL (F.), VESCHAMBRE (V.), 2002. -« Face à l'hégémonie du territoire: éléments pour une réflexion critique », dans JEAN (Yves), CALENGE(Christian) (dir.), *Lire les territoires*, Tours, Publications de la MSH, n° 3, p. 261-288.
- RIPOLL (F.), VESCHAMBRE (V.), (à paraître). -« Sur la dimension spatiale des inégalités: contribution aux débats sur la "mobilité" et le "capital spatial" », dans JEAN (Yves), ARLAUD (Samuel), ROYOUN (Dominique) (dir.), *Rural-urbain : nouveaux liens, nouvelles frontières*, Rennes, PUR.
- SAYAD (A.), 1980. -« Le foyer des sans-famille », *Actes de la recherche en sciences sociales*, n° 32-32 : «Paternalisme et maternage », avril-juin, p. 89-103.
- SOMMIER (I.), 2003. *—Le renouveau des mouvements contestataires à l'heure de la mondialisation*, Paris, Flammarion, 342 p.
- STARHAWK, 2003. *—Parcours d'une altermondialiste. De Seattle aux Twin Towers*, traduit de l'anglais par Isabelle Stengers et Édith Rubinstein, Présentation d'Isabelle Stengers, Paris, Les Empêcheurs de tourner en rond/Le Seuil, 188 p.
- STIGLITZ (J. E.), 2002. *—La grande désillusion*, traduit de l'anglais américain par Paul Chemla, Paris, Fayard, 325 p.
- TILLY (C.), 1986. *—La France conteste. De 1600 à nos jours*,

Paris, Fayard, 622 p.

TARTAKOWSKY (D.), 1997. *Les Manifestations de rue en France 1918-1968*, Paris, Publications de la Sorbonne, 869p.

TOURAINE (A.), 1978. *La Voix et le regard. Sociologie des mouvements sociaux*, Paris, Seuil/Le Livre de Poche, coll. « Biblio essais », 318 p.

ZIEGLER (J.), 2002. *Les nouveaux maîtres du monde et ceux qui leur résistent*, Paris, Fayard, 364 p.

解説

「NOROIS」⁽¹⁾の195号(2005年2号)は、ファブリス・リポールとヴァンサン・ヴェシャンブルによる責任編集で、「空間の領有 社会的不平等と権力関係の空間的次元について」の特集号となっており、両氏による「序論：問題構制としての空間の領有」のほか、理論や視点に関わる論文と、ベネゼエラ、アルジェリア、フランス西部、ルーマニアに關する地域研究が掲載されている。

フランス語圏の地理学では、1980年代以降、カーンやレンヌなどフランス西部地域に位置する諸大学の研究者らによって、社会地理学研究のひとつの潮流が生み出されてきた。この研究者集団の問題意識や方法論の検討は機会を改めて行いたいと思うが、大雑把な印象だけを述べておくと、社会地理学の方法論や認識論を深めるというよりも、個別の主題(教育、宗教、文化、差別など)を論じる傾向が強かったように感じられる⁽²⁾。ただし、2004年秋にレンヌ大学で開催された社会地理学のシンポジウム⁽³⁾などを見ると、若い研究者を中心に従来の問題設定や方法論を批判的に再検討しようとする動きも始まっており、リポール氏はそうした潮流を代表する一人と言えるかもしれない。氏は現在、パリの東郊外ヴァル＝ド＝マルヌ県にある東パリ大学クレティユ(パリ第12大学)の助教授であるが、本論文の執筆当時はカーン大学に所属し、フランス西部の地理学者を中心とした「社会と空間」の研究グループのメンバーであった。

本論文でも指摘されているように、公共財や公共空間の「私有(物)化」に対する批判的検討は、理論的にも実践的にも喫緊の課題となっており、地理学者による研究も増加している。そのなかで「領有」に着目するリポール氏の方法は、スタエリーとミッチェル⁽⁴⁾による公共空間と所有・領有形態の議論と交差する部分もあるように思われる。

(1) アンジェ、プレスト、ラ・ロシェール、ル・マン、リモージュ、ナント、オルレアン、ボワティエ、レンヌ第2、トゥールの各大学の地理学教室が共同で発行している雑誌で、レンヌ大学出版会から出版されている。

(2) たとえば、Philo, C. et Söderström, O., *La géographie sociale: la société dans son espace*. Benko, G. et Strohmayer, U. eds., *Horizons géographiques*, Bréal, 2004, pp.75-149 も参照。

(3) Séchet, R. et Veschambre, V. dir., *Penser et faire la géographie sociale ? Contributions à une épistémologie de la géographie sociale*. P.U.Rennes, 2006, Dodier, R., Rouyer, A. et Séchet, R., eds., *Territoires en action et dans l'action*. P.U.Rennes 2007, Séchet, R., Garat, I. et Zeneidi, D., eds., *Espaces en transactions*. P.U.Rennes, 2008.

(4) Staeheli, L. and Mitchell, D., *The People's Property? Power, Politics, and the Public*. Routledge, 2007.